

高温・干ばつ・用水不足

9月

水 稲

水稲節水栽培基準を参照のうえ、適切な水管理を行う。

- 1 短期栽培（6月中旬植えコシヒカリ）、普通期栽培（早生品種：あきさかり、はえぬき等）
落水期（成熟期前5～7日）頃までは黒湿り程度の水分状態を保つ方がよいので、田面が白乾きにならないように走水をして水分を補給する。
- 2 普通期栽培（中生品種：ヒノヒカリ、おいでまい等）
 - 1）登熟前期（出穂開花期後20日後頃まで）は、田面の湿潤状態を保つようかん水する。
 - 2）登熟後期（出穂開花期後20日～落水期）は、黒湿り程度を保つようかん水する。

大 豆

- 1 畦間かん水の行えるところでは、1週間間隔でかん水する。この場合、畦間に長時間滞水しないように、走り水程度とする。一方、畦間かん水が行えないところでは、水中ポンプや動力噴霧機等を利用してホースかん水を行う。
- 2 かん水が望めないところでは、土面蒸発を抑えるため、畦間に敷草等をする。
- 3 カメムシ類の多発が予想される場所では、防除基準に従って害虫防除を徹底する。

茶

- 1 土面蒸散を抑えるため、敷草、敷藁を十分に行う。また、樹勢が衰弱している場合は、秋肥の施用量を減らす。
- 2 かん水施設のあるところでは、水源が確保されれば、少量であってもかん水する。
- 3 クワシロカイガラムシの第3世代ふ化幼虫発生期であり、乾燥が続く場合被害の拡大が懸念されるため、ふ化幼虫を確認後、防除を実施する。

野 菜

収穫中の夏秋キュウリ、アスパラガス、青ネギ、ナス等、さらには定植中のイチゴのかん水は不可欠であることから、一回のかん水を十分に行い、遮光、敷藁等の蒸散抑制の対策を行う。

薬剤散布は薬害が発生しやすい条件であるため、単剤・低濃度散布で夕方の気温低下を確認して散布する。追肥は液肥を利用し、節水と利用効率を高めるため土壌灌注機等を利用すると良い。

レタス、ブロッコリー、キャベツ等は、畝立て作業後十分な散水が必要となる。特にマルチング作業を行うレタスについては、マルチ被覆の前に散水を行うことが活着を促進するためのポイントになる。

さらに、転作作物として地力作物（ソルゴー等）を栽培していた場合は、すき込み時に十分な碎土を行っておくことがソルゴーの分解を促進するために重要となる。

- 1 イチゴ
 - 1) 育苗中の苗は乾燥防止、生育促進、花芽分化を促進するために寒冷紗被覆の励行と、日中温度低下を図るために1日に2～3回葉面散水する。
 - 2) アブラムシ類、スリップス類、ハダニ類、萎黄病等の発生が予想されるので防除に努める。特に、萎黄病については、防除とともに早期発見による抜き取りを行う。
- 2 アスパラガス
 - 1) 十分なかん水を行う。
 - 2) 遮光資材の利用などにより、蒸散抑制策を実施する
 - 3) ハダニ類、ヨトウムシ類、スリップス類の防除を行う。

3 キュウリ

- 1) 干害を受け草勢の衰弱がみられる場合は収穫をやや早めに行い、夕方、葉面散布するか、液肥をかん注する。
- 2) ハウス抑制栽培のほ場では、遮光資材の利用などにより、蒸散抑制策を実施する。
- 3) 高温乾燥に伴い、アブラムシ類、スリップス類、うどんこ病、べと病等が多発しやすいので、防除に努めると同時に、急性萎凋症の株は果実を除去し、草勢の回復を図る。

4 キャベツ

- 1) 本ぽでかん水可能なほ場は4～5日毎に畝間かん水する。
- 2) 昇温抑制のため、育苗ハウスに遮光資材を展張する。ただし、過度な遮光による徒長には注意する。
- 3) 定植にあたっては植穴に十分かん水してから夕方に定植する。また、定植前に蒸散抑制剤を散布する。
- 4) ヨトウムシ類、コナガ、アブラムシ類等の害虫が多発するので防除に努め、苗床から防虫ネットを被覆する。

5 ミニトマト、ピーマン、ナス

- 1) 定植後間もない抑制栽培の作型では、芯止り等の異常茎の発生が懸念されるため、遮光と地温抑制を行い、カルシウムを含む葉面散布剤を定期的に行う。
- 2) 乾燥により尻腐果が発生するので、カルシウムを含む葉面散布剤を5～7日毎に中位葉以上に散布する。
- 3) ピーマンはモザイク病が多発しやすいので、アブラムシ類の防除に努め、罹病株は早めに除去する。また、ミニトマトはハダニ類の防除を実施する。

6 青ネギ

葉枯れ症を防ぐため、遮光ネットの利用を行い、夕方、葉面散水を行う。

7 金時ニンジン

- 1) スプリンクラーでのかん水は、朝のかん水を十分に行う。
- 2) 間引き作業は、萎れを助長するため3回間引きを行い、間引き後の日中散水を数回行う。

8 レタス

- 1) ほ場の土壌水分が少なく、肥料の分解が遅れることが予想されるため、畝立てと施肥は定植の20日前に終了させておく。
- 2) マルチ前には、十分散水をして水分を与えておく。
- 3) 苗床での管理としては、少雨傾向がヨトウ類、アブラムシ類の発生誘因となっているので十分に注意する。

9 ブロッコリー等

- 1) 畝立てを早めに行い、定植前日に十分散水してから定植作業を行う。
- 2) 苗床でのコナガ、ヨトウムシ類、アブラムシ類に注意する。

果 樹・オリーブ

1 土壌乾燥の防止

1) 敷藁、敷草の実施

かん水後に根の多く分布している場所へ稲藁、刈草等を厚く敷き、水の蒸散を防ぐ。

2) 草刈りの実施

雑草が繁茂している場合は、刈取りを行う。除草剤の利用にあたっては、接触型および吸収移行型を使用し、土壌処理型は使用しない。

2 かん水(節水利用)

水の確保量を勘案して計画的に実施する。

- 1) 水量が十分確保できる場合は、7～10日間隔で20～30 t /10 a を全面かん水する。(ただし、ミカンでの多量かん水は裂果を発生させるので10 t /10 a 程度とする。)
- 2) 水量が不十分な場合は、細根が多く分布している部分へ集中的にかん水する。1樹当たりかん

水量は150～200 $\frac{\text{mm}}{\text{日}}$ とし、約1週間ごとにかん水する。

3 樹勢の維持および樹体の保護

- 1) 結実量が多い場合は早急に摘果する。(柑橘、カキ、キウイフルーツ)
- 2) 着葉数の少ない樹勢衰弱樹や移植樹は、枝幹の日焼けを防止するため、白塗剤を塗布する。
- 3) 収穫の終わったブドウへの礼肥は降雨後に施用する。
- 4) 薬害防止のため、高温時、日中の薬剤散布を避ける。

4 病虫害防除

高温乾燥により、ハダニ類の発生が助長されるため注意して防除を徹底する。

花 き

1 敷藁、マルチの励行

マルチや稲藁等を活用して、土壌からの蒸散を抑制するとともに、地温の上昇を防ぐ。

2 病虫害防除

ダニ類、アブラムシ類、スリップス類、ヨトウムシ類などの発生が多くなるので防除に努める。

高温時の散布は薬害が生じやすいので、朝夕の涼しい時に薬液濃度を薄めにして散布する。

3 かん水

かん水時刻は高温時を避けて、早朝あるいは夕方に行う。

限られた水量を使用する場合、回数を減らしても一回当たりのかん水量を多くし、根群全体に水分供給ができるようにする。

4 遮光資材の利用

高温障害が予想される場合は、遮光資材(透過率70%程度)を掛けて、気温の上昇を緩和する。

特に定植から活着期にかけては、寒冷紗などで遮光し、活着促進を図る。

5 施肥

追肥は高温・干ばつが解消されるまで中止し、もしどうしても必要な場合は、置き肥でなく薄めの液肥を与える。

6 電照

キクなど高温乾燥によって花芽分化を起こしやすいものは、電照開始時期を早めるとともに電照時間をやや長くする。

7 土寄せ

根量を増加させるため、できるものは株元に土寄せし、新根の発生を促す。

畜 産

1 家畜管理

家畜の飲用水は十分に確保するとともに、防暑対策を確実に実施して、家畜の事故発生と生産性の低下を防止する。家畜の異常は早期に発見し、初期の治療に努める。

1) 畜舎環境の改善

- ①ファン送風の実施、通風の改善
- ②直射日光の遮光、日陰樹の利用
- ③飼育密度の軽減等

2) 飲用水および飼料の管理

- ①十分な飲用水の確保(貯水タンク設置、飲水器からのこぼれ水防止等)
- ②畜舎やパーラー等関連施設等で利用する水の節減(除ふんを徹底して、消毒の効果に支障をきたさない程度に節水)
- ③飼料の早朝および夜間給与(比較的涼しい時間帯に実施)
- ④飼料保管管理の徹底による変敗防止等
- ⑤必要に応じ、ビタミンやミネラル等の補助飼料を適正に給与

2 飼料作物

収穫可能な飼料作物は早急に刈り取り、サイレージ等に調製する。粗飼料不足が懸念される場合には、イタリアンライグラス、エン麦等の秋作栽培も含め、冬作の作付草種、時期等を調整する。